

アジア舞台芸術祭
参加者インタビュー#05

三科喜代さん（チャン・ウェイニン（台北）チーム／演出助手）

今年、台北のダンス・カンパニー「世紀當代舞團」の演出家、チャン・ウェイニンさんとヤオ・シューフェンさんのチームに、演出助手として参加した三科さん。2012年のアジア舞台芸術祭では、「アマヤドリ」の広田淳一さん（日本）チームの役者として、「身聲劇場」の女優2名と共演しました。自身の演劇ユニットでは作演出を担当しているため、今年は演出助手として参加しました。

ですが演出助手の仕事は、想像以上に忙しいものだったようです。稽古場のサポート、小道具などの買い出しに奔走する一方で、本番中はSkypeを使って劇場外で演じられるシーンの生中継も担当。

また稽古場には、韓国、台湾、日本それぞれの俳優が混在し、韓国語、台北語の通訳が常駐。それぞれの言語が飛び交う一方で、より直接的に話すべくカタコトながら英語で演出家、ダンサーとやりとりすることも多かったそう。

こうしたコミュニケーションの複雑さはあったものの、チームワークはとても円滑だったようです。

「皆さん明るくて優しく、とてもいいチームでした。去年もそうでしたが、やはり”言葉は関係ない”と感じました。演劇という表現を通じて分かり合えるし、チームワークでの作品づくりを通して仲良くなれるんです」

作品づくりのプロセスでは、演出家が来日前に決めていたあらすじをもとに、エチュードを重ねていきました。

「米」というモチーフを通して描かれる家族の物語でしたが、それは隣り合うアジア各国の文化の共通点・相違点も浮かび上がらせるものでした。

「台湾のお米が日本とそっくりで、文化的にも日本と近いんじゃないかなと感じました。台湾や韓国も核家族が多く、一人でご飯を食べることが増えているそうなんです。

一方で、台湾で行われるお米を使った占いが登場したり、韓国人俳優のキムさんが、家庭を持った今でも”月に一回はご両親と食事をする”と聞いて驚きました。ご両親や先祖をととても大切にされていて、そうした“思う心”は、日本人が忘れているものなのではないかと思いました」

またフェスティバル全体を通じて、日本以外のアジア各国のパフォーミング・アーツが「想像以上に進んでいる」ことも印象的だったと言います。

「キムさんから、韓国には小劇場の劇団が1000以上もあると聞き、“そんなに盛んなんだ”と驚きました。台北から来ているダンサーたちもとても素敵で、日本より進んでいるかもしれない、と感じました。

日本では今、演劇を観ることがちょっと特殊なことになっていると思います。みんなが観に行くものにはなっていない。お客さんも以前ほど足を運んでくれなくなっている気がします」

アジア各国の演劇人たちとの作品づくり、そして上演を通じて、これまで知らなかったアジアのいくつかの顔を発見した三科さん。その過程は、ネガティブな面も含めた日本の現状を再認識するプロセスでもあり、同時に役者としての彼女を大いに刺激し、励ますものでもあったようです。

「私が稽古している時に、世界のどこかで彼らも稽古しているんだと思うと、仲間が増えたようでとても嬉しい。機会があればまたアジアの役者たちと共演したいし、作品づくりに携わりたいです。

違う国の人たちが協力してひとつの作品を作る、ということの素晴らしさは、お客さんにも伝わると思います。もっとたくさんの方に見に来て頂きたいフェスティバルですね」